ドリームハンター

時雪崩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ドリームハンター

【Ｎコード】
Ｎ８８６２Ｄ

【作者名】
時雪崩

【あらすじ】
生き物の夢に入り、夢の一部を盗む人がいる。それは、この世界では絶対に手に入らないもの、だから危険を冒してでも彼は行く・・・

ミッション1　竜洞と彼（前書き）

楽しんで読んでいただけたら嬉しいです。

ミッション1　竜洞と彼

今、僕は暗闇の中いる。
辺りには蟻すらの光もない。

「ここはどこだ？」

考えた結果、僕はどうする事もなく、座り込んだ。
その時辺りの暗闇はなくなった。
そして、山の上に来てしまった。

「これは、雲？」

近くにあった白く浮かぶフワフワした物は雲だと僕は判別した。
山はまだまだ上に続いている。

「ドサ　ドサ　ドサ」

何かが雲の向こうから向かってきた。
その時、僕は彼とあった。
彼は口は悪く、態度もでかかった。

「おい、そこのお前ここは竜洞か？」

「竜洞？」

「これはお前の夢なのだからしってるだろ」

「これって夢なのか？」

「お前馬鹿か？」

「会ったばかりなのに馬鹿は失礼だろ」

「しるか、どうせお前なんかに興味はない」

そういって彼は山を上がっていった。
僕も後を追っていった。
３０分くらい上がっていくと頂上についた。
そこには大きな穴があった。
彼は入っていった。
僕も気になったのでついていった。
そこには水晶や翡翠などが生えていた。

「すげぇ」

「なんだお前ついてきていたのか？」

「わりぃのか？これは俺の夢なのだからいても悪くはないだろ」

「別に・・・でも良いことをおしえといてやるよ、これは夢でも死ぬぞ」

「またまた嘘を・・・夢で死んだとか聞いた事ないし」

「俺は冗談は言わない」

彼はまたそうゆって歩きだした。

「おいこの翡翠とか取らないのか？」

彼はこっちを向いたがすぐにまた歩き出した。
くねくえした道を行くと広い広場に来た。
そこには１匹の竜がいた。

「すげーあれって竜なのか？」

「音を立てるな・・・起きたら一口でおしまいだ。だからそこでたっていろ」

「おいまてよ。あれは竜なのか？」

「いちいちうるさいな。あれは竜だ。気が済んだか？」

「もうひとつ。竜は架空の生物なのになんでいるんだ？」

「さっきもいったがこれは夢だ」

「じゃなんで俺の夢に君がいるんだ？」

「俺は・・・お前が知って良いことではない。いいからそこにたっていろ」

そういって彼は竜に近づいていった。
僕は不におちないまま、その場たっていた。
何もする事がなかったので僕は彼の行動を見ていた。
最初は彼は竜の鱗を見ていた。
そして、竜の口元へ向かっていった。
彼は開いていた竜の口に入っていった。

「おいぃ」

竜は起きなかったが、彼が心配だった。

「竜でも胃液はあるよな・・・とけるのかな」

なんてことを考えていたがこれはやばいことだ。
僕は彼にたっていろ、といわれたが心配だったので竜のところに行った。
はじめてみる竜は大きかった。
牛何百等分だろう？
それより口の中の彼は大丈夫なのだろうか？
でもこれは夢なのだからだいじょうぶだろう。
彼は死ぬといったがそれは脅かしかなんかだったんだろう。
そうだ竜の口の中に入ってみよう。
そう思って僕は竜の口元にいくと竜の鼻息でこけてしまった。

「痛て！！！」

右手に翡翠が刺さった。
すると、ものすごい音で竜が起きた。

「誰じゃワシの眠りを妨げるものは・・・」

僕は近くにあった岩の裏に隠れた。

「そこの岩に隠れている者よで出来なされ」

僕はおどおどしながら岩陰からでてきた。

「なんじゃ子供か・・・柔らくておいしんじゃろうな」
「おいまてよ。これは俺の夢なのだから食べても何も味もしないぞ」
「ほっほっほ馬鹿な子どもじゃ。夢でも食べれるのじゃ」
「死にはしないよぁ？」
「死ぬにきまっとるじゃろうが・・・」
その時
「ごっほごっほうぇ」
竜の口の中から彼が出てきた。
唾液かわからない液が体にいっぱい粘り付いていた。
「おいだから立っとけってゆっただろうが」
彼は怒っていた。
「いいだろこれは俺の夢なのだから・・・」
「またおいしそうな者が増えたわい」
「くっそ。逃げるぞお前」
彼は僕の手を握ってきた道を戻っていた。
だか竜は追いかけてはこなかった。

「おい、はなせよ」

僕は彼の腕を振りほどいた。

「お前死にたいのか」

「死ぬわけないだろ、夢なんだから・・・」

「お前やっぱり馬鹿だな。さっきの事聞いてなかったのか？これは夢でも死ぬんだ」

「意味わかるかよ。夢は夢だろ」

「これは夢でも幻想夢（たからゆめ）なんだよ」

「なんだよその幻想夢（たからゆめ）って」

「今は時間がない。良いから逃げるぞ」

彼はものすごい行きよいで僕を引っ張っていった。

竜は後を追いかけてはこなかった。

「もう大丈夫だ。この馬鹿」

「だから馬鹿は失礼だろ！！！」

「馬鹿は馬鹿だろうが、たっている事もできないのか？」

「うぅそれは」

「いいか、この幻想夢(たからゆめ)は生き物が一生に1回だけ夢の中に入る事ができる夢なんだよ。その中に入って財宝を盗んでくる俺達を、夢の狩人(ハンター)ってゆんだよ」

「ってことは夢を盗むのか？」

「違うな。夢を盗むのじゃなくて、夢の中の話の一部を盗むんだ。さっきは竜の体中にある宝石を狙ってたんだ」

「盗まれた夢は戻らないのか？」

「普通の生き物は夢の中に入っても盗む事か動く事も出来ない。だがお前は違うらしいがな。だから夢の一部を盗んでも全然支障はない」

「盗んだ夢はどうするんだよ？」

「売るに決まってるだろ」

「売るってお金にするのか？」

「あぁそうだが」

「誰にだよ？」

「この世界にはいない人たちにだよ」

「違う世界・・・じゃお前もこの世界の人間じゃないのか？」

彼は腰につけてあった時計を見た。

「あぁ違う世界から来た。あと良いことを教えてやろう。もうすぐでこの夢は終わる。お前は起きておしまいだ。俺ともあう事もないし、この幻想夢(たからゆめ)になる事もない。よかったな」

「そうかもう起きてしまうのか俺」

「あぁそうだ」

「なぁせめて君の名前を教えてくれよ」

「なんでだ」

「だって夢であって話した人なんて今までにいなかったから・・・」

「まぁいいだろう別に・・・名は射月(いづき)だ」

「そうかありがとう」

「何で感謝するんだ?」

「わかんねぇ」

「ふっ変わった生き物だったな・・・それじゃぁな」

「あぁ」

彼は僕の前から消えた。

そして僕も夢から覚めた。

右手には翡翠と手紙を持っていた。

「手紙？」

僕は手紙を読んだ。

―右手の傷は直しておいた。
後、翡翠はおみあげだ―

（いつの間に書いたんだろう？）

「ドスドスドス」

誰かが階段から上がってきた。

「おきなさい。もう7時よ。遅刻しても知らないからね」

母だった。
僕はベットから降り、机に翡翠をいれ下に降りた。

そして、いつもと変わらない日々を過すのであった・・・

ミッション1　竜洞と彼（後書き）

評価・感想などを書いていただけると嬉しいです！！！

ミッション2　もう一度・・・（前書き）

夢の中の狩人・・・ドリームハンター
それはなぞの人物・・・だった

ミッション2　もう一度・・・

昨日のことが頭から離れなかった。
射月は今はどうしているだろう？
そんな事を僕は考えていた。
また射月とあって話したい。
でも彼は幻詩夢（たからゆめ）は1回しか見れないといっていた。
もう彼とは会えないんだ・・・
何か悲しい、悔しい・・・
学校の机の上でそんな事を考えていた。
友達にそんな事を話したら馬鹿にされるだろう。
クソどうしたら良いんだ。
そうだ俺が人に憑く事が出来たら良いんだ。
でも無理だ。
そんな事を出来るわけもないし、した人なんて聞いた事もない。
はぁ、帰ろう。
鞄を持ち、靴を履き替え自分の家に帰った。
家には誰もいない。
母は出張で4日ぐらいいないらしい。
父はいない。
兄弟もいない。
家には僕だけしかいない。
悲しいな・・・
ソファーに横になった。
いつの間にか僕は寝ていた。
また夢か、この暗い光も無い場所は・・・
「お・・い・・・お・い・・・」

何か声がする。

「お・・・い・・おい」

「誰だ？」

「俺だ・・・い・・・・・・づ・・き・・だ」

「射月！！！」

「あ・・ぁ・・俺だ」

「なんで！？なんで！？」

「そっか・・・お前・・・は知・・らないんだな」

「何が？」

「お・・前は昨・・日・・・だんだ」

「えっ聞こえないよ」

「だ・・から・・お前は・・・よ」

「だから聞こえないよ、射月」

「・・・・・」

「射月」

僕は目を覚ました。
汗をダクダクかいていた。

「射月」

ぼそっと呟いた。

僕は時間を見た。
もう夜中の2時だった。

「嘘だろ・・・まぁ良いや、もう一回寝よう」

自分の部屋に向かわず、ソファーの上で眠りについた。
また夢が見れる事を信じて・・・

ミッション2　もう一度・・・（後書き）

2話目です。
更新が1ヶ月もかかってしまいました。
すみません
もっと頑張っていこうと思うので応援よろしくお願いします！！！

ミッション3　天魔城

射月の言っていたことの意味がまだよくわからなかった。
俺は昨日どうなったのだろう？
でもなんで射月にまた合えたのだろう？

鳥のさえずりが聞こえる。

もう朝だ。

母のうるさい足音は聞こえない。
僕は時計を見た。

「やばいもう8時過ぎてるぞ」

急いで制服に着替え、鍵をしめ自転車にまたがり学校に向かう。
学校に着いたときは始まりのチャイムは鳴っていた。
遅刻だ・・・
初めてではなかったが、遅刻をすると先生の嫌がらせが来る。
最悪だ。
あの先生の嫌がらせはシツコイ・・・
何とかできないかな・・・
もう良いや、嫌がらせしてきたら無視してやる
僕は堂々と教室に向かった。

「おはようございます」

誰も見向きもしなかった。
ホラ来た嫌がらせ。

レベル1・クラス無視。
でもまだこんなのは序の口。
次に来るのは・・・僕は自分の席の場所に向かった。
ホラ来た嫌がらせ。
レベル2・席失くし。
はぁまったく良い迷惑だ。
今日はどこにあるんだろう？
後で探しに行くか。
どうせ今聞いても誰も話さないだろうし。

昼休みになった。

僕のとこの学校は給食性だ。
給食センターの人が平等についでくれているのを持ってくるだけ。
ホラ来た嫌がらせ。
レベル3・給食無し
学校で欠席にすると給食は作られない。

「もういいや、帰ろう・・・」

僕は家に帰った。
寝よう・・・
ソファーに横になり眠りについた。
あぁこの暗い世界夢だ。

辺りは紫色の煙が立ち、白の城が建っていた。
これは魔界？

「また馬鹿発言だな」

僕は横を振り向いた。
そこには射月がいた。
「射月・・・」
「久しぶりだな珍しい生き物」
「やっぱり口悪いな射月」
僕の話を無視して射月が話した。
「それより早く城に行こう」
「今回の宝はなんなんだ？」
「今回は宝じゃない。」
「えっ？」
「今回はお前だ」
「俺？」
「あぁ、今日はお前がメインだ」
「何でだよ？」
「まぁ早く城に行こう」
射月はいきなり走って城に向かった。

僕もそれにつられるように走った。

白い城に着いた。

「ここが天と地の境の天魔城だ」

いきなり入り口がギギーーという音を立てながら開いた。
中に入ると赤いレットカーペットが先が見えないくらいずっと続いていた。

「さぁいくぞ。後、しゃべると口かむぞ」

「えっ」

赤いレットカーペットに足を踏み込むとカーペットがものすごい勢いで動き出した。

「うわぁあああ」

カーペットは止まった。
止まると同時に体が前に進んで行った。
僕は舌を噛んでいた。

「さぁ着いたぞ。この方が天魔様だ」

「天魔様？」

顔を上に向けると・・・デカイ・・・おっさんが椅子に座っていた。
そして、今まで聞いた事のないような声でこういった。

「お前は一昨日死んだのはしっておるか？」

「・・・・えっ？」

横にいた射月が言った。

「お前は死んだんだ」

僕は話の内容がうまくつかめなかった。

するとまたでかい声で

「一昨日の昼にお前の母親がお前を殺したんだ。包丁で。お前は寝ておったから、痛むことなく死んだ。お前の死体はロッカーの中に入れられて隠されている。お前は気が付かなかったのか？」

僕はこの2日くらいの事をよく思い出した。

そうだ。今日の学校あれはもともと僕はいなかったんだ。

じゃなんで記憶が？

射月がいった。

「この前お前の夢に出ただろ俺が。あれはこの事を知らせるために行ったんだ。でもお前の力が薄れたのか声がとどなかった」

「そっか死んだんだ俺・・・・あはははは、ははははは。じゃ今から裁かれて地獄の釜でぐつぐつ煮られておしまいか。あはははは」

「馬鹿もの！！！！」

さっきまで笑っていた僕がビクッとした。

「お前は射月の感謝を無駄にするつもりか？！」

ミッション3　天魔城（後書き）

更新遅れた事すみません。
さて、これとは別に書いていた恋愛日記がついに終戦しました。
この話もどうしよっか悩んでいます。
終わらせようか。続けようか。
まぁそれは気分しだいで行きたいと思います。

ミッション４　射月の過去

俺は家族がどんなんで、親がどんな性格だったか知らない。
知っているのは犯人の顔だけ。
そう俺の親は殺された。
警察は自殺として終わらせた。
俺はその時２歳だった。
だから、こいつが犯人とはいえなかった。

月日が流れて俺は養子としてまったく血のつながってない人のとこに向入れられた。
名前も恭介から射月になった。

１５歳の秋の事だった。
俺は家を出た、もうあの家には帰るつもりはなかった。
酒、酒、酒ばかりの家。働かずに酒。嫌だった。
家の金を全部持って家出をした。
初めての野宿はなれないものだ。
公園のベンチ。
秋風が体を攻める。

家出をして１週間俺は死んだ。
いや殺された。
そうあの１３年前と同じ犯人に・・・
あの犯人は何をしたかったのだろう。
ただ殺したかったのか、金目当てか。
俺は死んで天魔城で天魔様に会った。
そこで言われたのは
「お前ここで働いて、その犯人が裁かれるのを見たくはないか」と

いわれた。
俺は考える事もなく働く事にした。

仕事も変わっているものばかりだった。
夢に入り宝を盗んでくる。
どうやら天魔様は宝物好きらしい。
そしてもうひとつ仕事があった。
現世に行き、俺を殺した犯人の監視。
もうその仕事を8年近くしている。
楽しいかといわれると楽しいとはいえないが、楽しくないともいえない。
まぁ俺の命も犯人がこの世界に来て裁かれたら終わりだ。
それまで、命を助けてくれた天魔様に尽くすつもりだ・・・

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8862d/

ドリームハンター

2010年10月9日21時29分発行